

② 大阪市内にすむ生き物

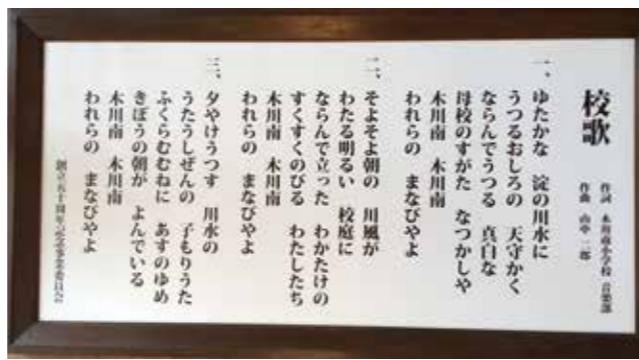


① 淀川にすむ生き物

干潟
干潮の時に沿岸域や河口に現れる砂や泥がたまつた場所のこと。海の波の影響が少なく、河川が流れ込み砂や泥を運んでくる場所にできます。



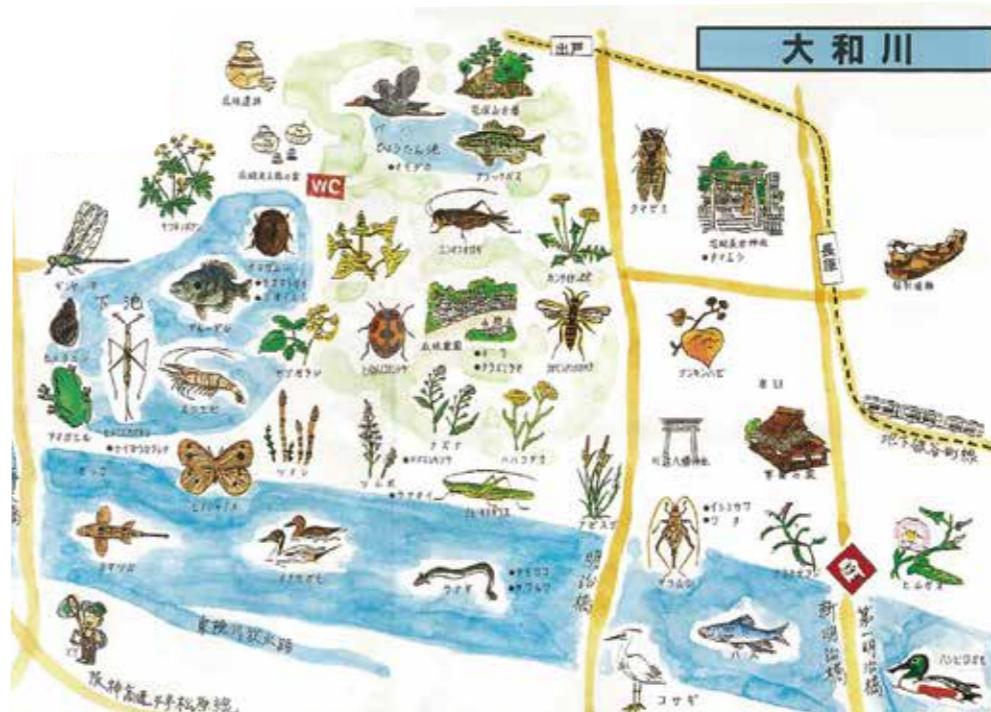
なにわ緑景(1990年) 大阪市北部(淀川)より抜粋



淀川区 木川南小学校校歌

② 大和川にすむ生き物

淀川と同じように、大和川もわたしたちのくらしを支えてきました。大和川は、10年ほど前まで、水質が悪く、きたない川とされていました。しかし、現在は以前と比べて水質が大幅に良くなっています、さまざまな生き物がもどってきました。アユやウナギをはじめ、絶滅のおそれのあるメダカやドジョウなど多くの魚が生息しています。なかでもアユは春に大阪湾から大和川をさかのぼる数が1万尾から3万尾と推計されており、秋には東住吉区や平野区で産卵が確認されています。



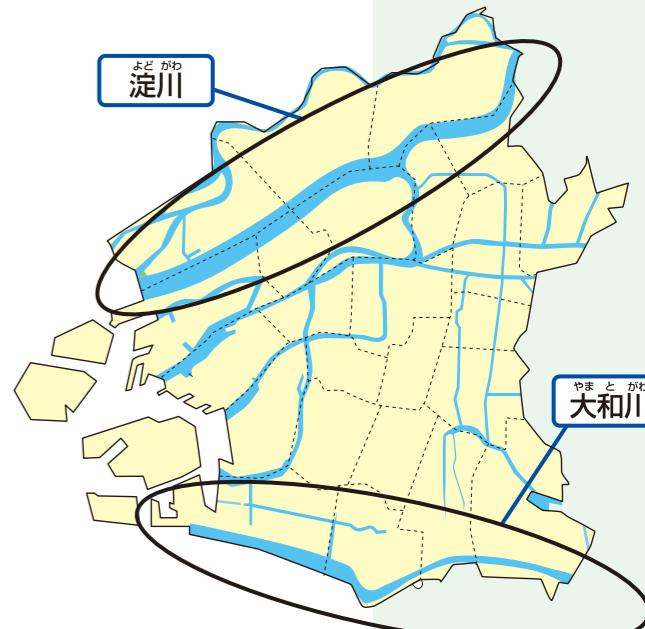
なにわ緑景(1990年) 大阪市南部(大和川)より抜粋



どちらの川の絵にも
外来種がいるよ!



平野区 川辺小学校校歌



③ 人がつくり変えてきた淀川の環境



① ワンドとは？

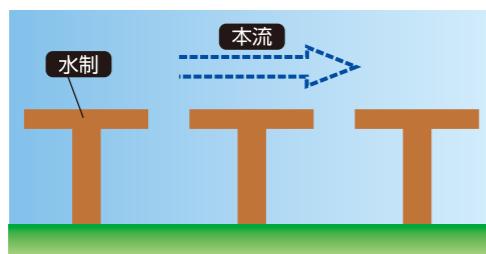
明治の初めごろ、大阪湾から淀川を通って京都まで蒸気船が通ることができるように、淀川の水の深さをたもち、流れる速さをおさえることを目的として「水制」（水はねともいいます）というものがつくられました。この水制に囲まれたところに土や砂がたまり、その上に水ぎわを好む木や草がしげり、現在のワンドができあがりました。ワンドとは、淀川本流とつながっているか、水がふえたときにつながる河川敷の池のことで、小さなものでも小学校のプールの10倍、大きなものでは25倍ぐらいの面積があります。



水制の模型
この水制で囲まれたところがワンドになりました。



淀川の水制（1939年）



ワンドができたしくみ

ワンドは水の流れがあまりないため、池などにすむ魚たちにはくらしやすく、水辺の植物の生えているところは魚の産卵やち魚がくらす絶好の場所となつたのです。

② 自然の宝庫 ワンド

ワンドは、大きさ、深さなどがさまざままで、いろいろな形があります。底が砂やどろのところ、水制の石積み、水草がしげる場所など、たいへん變化に富んでいます。多くの種類の生き物がいっしょに生きてています。

淀川全体で約80のワンドがあり、一つひとつ環境が少しずつちがっているので、それぞれがいろいろな種類の生き物のすみかになっています。

大阪市内には、旭区や都島区、東淀川区などに約30のワンドがあります。



ワンドにすむ魚

カネヒラ

ニゴイ

ギンブナ

ヨドゼゼラ
(淀川水系のみに分布)



昔の淀川での写真です。さて、これは何でしょうか？どこで見たことのある形だね。

ワンド近くに飛んで来る水鳥

アオサギ

ヒドリガモ（冬鳥）
左：めす、右：おす

コアジサシ（夏鳥）

これは「みおつくし」といって、舟の航路を示す標識です。昔の淀川では、土砂がたまり、浅くて舟が航行できない場所が多いため、舟が安全に航行できる場所に立てられ、航路を示しました。

みおつくしの上半分は、大阪市の市章になっています。

ワンドの水面や水中にすむ昆虫

エサキアメンボ

ハイイロゲンゴロウ

ワンド近くの希少植物

ワンドスゲ

タコノアシ

これらの生き物以外にも、ワンドにはさまざまな水辺の植物が生え、また水中にはヒメタニシやカワニナ類などの巻貝、イシガイなどの二枚貝、エビのなかまなどを見ることができます。